令和元年度　第３６回北海道高等学校文化連盟上川支部図書委員研究会

全体会のご案内

講演『生きるということ』

講師　特定非営利活動法人　かわうそ倶楽部　事務局長　中尾　伊早子　様

「かわうそ倶楽部」について　　　　　　　　　　　　　　　　（かわうそ倶楽部事務局より）

　かわうそ倶楽部は、絵本作家のあべ弘士が主宰するＮＰＯ法人です。旭川市７条通でギャラリープルプルを運営し、「ひと」「くらし」「しぜん」「アート」をつなぐ創造的な活動を行っています。「かわうそ」は、のんびりした性格で、愛嬌があり、遊びが大好きな動物。そんな「遊び心」を、生きる上でとても大切にしているカワウソにあやかり、「今を楽しみながら未来をつないでいきたい…」かわうそ倶楽部は、そんな思いで2011年４月に活動をはじめました。

「しぜん」は身も心も落ち着かせ、物事を静かに考えさせてくれます。「まち」は人と人が出会うことで多くのエネルギーがうまれてきます。そこから「アート」が生まれ、「遊び」は想像力を育むとかわうそ倶楽部は考えます。人と人、世代と世代をこえ、いっしょに楽しい<こと>や<もの>を創造していきたい、未来につながる「くらし」を探っていきたいと思っています。

かわうそ倶楽部では、こどもから大人まで気軽にアートを楽しめる作品展を年６回開催。理事長あべ弘士の絵本原画展や、地元作家を紹介する作品展を企画しています。展覧会のテーマに合わせ、ものづくりを体験できるワークショップや、親子向けの工作イベント、緑道・常磐公園を散歩しながら俳句を詠むイベントなど、様々な企画を年間通して開催しています。

　また、緑道を中心とした街の活性化にも取り組んできました。2012年に旭川発のアダプト制度を取り入れ、緑道の植栽管理を通して旭川らしいライフスタイルをデザインするボランティア団体「緑道ワークス」を立ち上げ、活動の幅が広がっています。

事務局長　中尾　伊早子　様から　　　　　　　　　　（旭川西高校　滝沢先生へのメールより）

　還暦を目前にして人生を振りかえりますと、節目節目で、色々な本に出会い、心の支えになっていたことを思い出し、本を通して「生きるということ」と向き合って来たように思います。

私の仕事は、現在は地域づくりに関わっておりますが、放送局でのラジオ番組のＡＤに始まり、エレクトーンのデモストレーション、タレントのマネージャー、画廊勤務、広告代理店勤務、在宅ホスピス本の出版のお手伝い、イベントの企画・運営、演劇の指導・構成・演出など様々な仕事を経験しました。

働きはじめた頃は「お金を稼ぐこと」が目的でしたが、いろいろな人と出会い、様々な経験を重ねていくうちに、「稼ぐこと」よりも「生きること」を考えるようになりました。

そこで、40歳の時に東京でＮＰＯを設立し、それから10年後、50歳であべ弘士さんと「かわうそ倶楽部」を設立しました。

本と、映画や演劇などの芸術が、人生の節目を迎えたときに、次のステップに踏み込める心のエネルギーとなったことを伝えられればと思っております。

分科会のご案内

【第１分科会】

講演：『人生の塩狩峠』

講師　三浦綾子記念文学館　学芸員　長友　あゆみ　様

「三浦綾子（みうらあやこ）」さんについて　　　　　　　（三浦綾子記念文学館Webページより）

1922年4月、北海道旭川市生まれ。高等女学校卒業後、17歳から7年間小学校教師を勤めるが、太平洋戦争後、罪悪感と絶望を抱いて退職。その後、肺結核と脊椎カリエスを併発して13年間療養生活を送る。闘病中にキリスト教に出逢い、1952年に洗礼を受ける。1959年、三浦光世と結婚。1964年、朝日新聞の1000万円懸賞小説に『氷点』で入選し作家活動に入る。その後も『塩狩峠』『道ありき』『泥流地帯』『母』『銃口』など数多く小説、エッセイ等を発表した。1998年、旭川市に三浦綾子記念文学館が開館。1999年10月、逝去。

「三浦綾子記念文学館」について　　　　　　　　　　　　（三浦綾子記念文学館Webページより）

三浦綾子記念文学館は、三浦綾子の文学の仕事をたたえ、ひろく国の内外に知らせることをねがい、多くの人々の心と力をあわせてつくられました。それはまた、三浦文学を心の豊かな糧（かて）としてのちの世につたえていくことも目的にしています。

三浦綾子は、1964(昭和39)年、小説『氷点』で日本の文学界に登場しました。長編小説をはじめ、多様なジャンルにわたる作品群を遺しています。その三浦文学の主題は「ひとはどのように生きたらいいのか」という問いかけです。それを三浦綾子は、庶民の視点に立ち、人間への限りない関心とすぐれた観察力をもっておしすすめています。キリスト者である三浦綾子の文学の才能は、聖書につながれています。同時に、人間のあり方を問いかける姿勢において、三浦文学は、垣根をこえてすべての人にひらかれ、魂の共通の財産となっています。三浦文学のその新しい人間主義の性格を、この文学館では、＜ひかりと愛といのち＞ということばで受けとめ、いいあらわしています。

【第２分科会】

講演『小熊秀雄－星の光りのように－』

講師　小熊秀雄賞市民実行委員会　運営委員長　氏家　正実　様

「小熊秀雄（おぐま・ひでお）」さんについて　　　（小熊秀雄賞市民実行委員会Webページより）

1901年（明治34年）～1940年（昭和15年） 北海道小樽生まれ。

早くに母を失い幼少期からさまざまな職業をへて成長。21歳の時に姉のツテで旭川新聞社に採用される。やがて文才を発揮して、文芸欄に詩や絵を発表。27歳の時に上京して豊島区長崎町に住む。長編叙事詩集「飛ぶ橇」で詩人としての地位を確立。自由や理想を奔放に歌い上げる作風で、言論弾圧が厳しくなり沈滞していた詩壇に新風を送った。また、さまざまな芸術家が住んでいた池袋長崎町周辺を「池袋モンパルナス」と命名し、無名の芸術家たちの自由な解放区を育てたことでも知られている。

「小熊秀雄賞市民実行委員会」について　　　　　（小熊秀雄賞市民実行委員会Webページより）

現代詩界を代表する賞の一つとして高く評価されてきた小熊秀雄賞が「明年(2007年)の第40回をもって終了」と発表されたところ、全道、全国から惜しむ声が相次ぎました。2006年11月1日、小熊秀雄賞市民実行委員会は、小熊の業績をたたえるとともに、「北の文化」として受け継ぐべく発足しました。

　小熊秀雄は、日本が戦争への道をたどりつつあった時代、生活者の感性に根ざした批判精神をもって生き抜き、多彩な才能を発揮して、詩、童話、絵画、評論、漫画原作等、優れた作品を残しました。彼の生涯に思いを馳せ、日本の現代詩の発展に寄与することを目的とした小熊秀雄賞を継続させるため（発足したのが小熊秀雄賞市民実行委員会です。）

演題「小熊秀雄－星の光りのように－」について　　　　　　　　（講師　氏家　正実　様より）

　「星の光りのように」は小熊秀雄氏の詩のタイトルで、小熊秀雄賞市民実行委員会で出版した詩集「小熊秀雄詩撰　星の光りのように」のタイトルでもあります。「光り」は小熊氏の作品名通りに使っています。

【第３分科会】

『旭川市中央図書館バックステージ・ツアー』

講師　旭川市中央図書館　司書のみなさん

　図書館司書の仕事や図書館のバックステージでの仕事について、見学・説明をしていただきます。